

東 欧 雑 感

田 嶋 喜 助

最近東欧への関心が高まっている。私共の会社も時折記事になり今回早稲田無機で4月21日にこの事からんで話をする機会があった。私自身も'73と'78年2度ルーマニアで仕事をした経験もあるのでその時々と感じた事をまじえて雑感とさせていただいた。

東欧の話に入る前に私共の会社の海外との係わりを述べたい。現在海外に26社(持株20%以上)を有し、内19社が生産会社である。海外生産高は2千数百億円にのぼりこの点で日本指折りである。日本人社長は6社にすぎない。中でも'81年にベルギーのグラバーベル社を買収し現在ECで20%の板硝子シェアを有する。ここは我が社が1907年の創業時よりずっと技術を供与し続けてくれた会社であり特に先方の各工場では複雑な気持であったと察せられる。人の交流に心掛け技術も公開に努め当方のノウハウを先方に役立てる等の地道な努力を続けたが業績の立ち直りは著るしくその社長は我国の日経連会長に当る要職につくなど時折日本の新聞にも登場した。当社からは若い人が数名滞在しているにすぎず現地の経営にゆだねた方式である。

又、当社は営業シェアにのみ関心があるのではなく、社会文化面への貢献を大切な理念としており創業25年事業として1933年には旭工業技術奨励会を発足させ応用化学分野を中心にこれまでの活動は研究助成3000件、30億円に及ぶ。

創業50年には学生奨学金制度、同75周年で前記研究助成を海外に拡げタイ、インドネシア各大学へ助成し米国オクラホマ大学には最近冠講座を設けた。インドネシアでは工業高校を校舎設備一式建設し国家へ寄付している。今年4月より、助成分野を応用化学から科学・技術全般に拡げ母体も旭硝子財団へと発展させた。研究助成を早くから深く静かに展開し海外に迄拡げて来た点は他の追従を許しておらず先輩の爛眼に頭が下るのみである。

海外との係わり合も同様に早くから静かに進展しており本題の東欧との関係も今急にはじめた訳ではない。70年代に当社独自の板硝子製造技術であるアサヒ式(A式)が約20カ国に輸出されたがその中に東独、ポーランド、ルーマニア、ハンガリーの共産圏諸国があり多くの人が来日又当社の者も交渉や指導の為各国に滞在しその中で人脈も多岐に広がった。初対面であっても同じ釜の飯仲間は何が相通ずるものがあり絆は相当である。当時の人達が工場長に、公団幹部にと言う具合で

事ある毎にやりとりは切れていなかった。最近東欧とくにポーランドの事で当社が記事になる事があるが該当工場とは面識がある。本件はIFCともよくFSを見極めねばならず色々検討の段階である。遠い国の事は仲々判らないが、当社は前述の様にECに多少の足掛りもあることは幸いと言えよう。

話を私がルーマニアで得た2つほどの体験に移したい。共産圏は一枚岩なる話の実態と東欧は西欧の庭と言う話である。

1973年と78年に前述のA式技術を先方が導入したいというので同国政府と交渉及び工場視察で先ず訪問し次には更に広い提携をという事であった。ドラキュラ伯の故郷でもあるカルパチア山脈をぬけた所にあるティルナベニという工場迄足を運んだ。工場の人々の暖かくかつ熱心に習得しようとする雰囲気は印象的であった。

二つの話はこの山中の事でなく、首都ブカレストでの事である。

先ずオトペニ空港の窓硝子の粗末な事が印象に残りつつホテルであるインターコンティブカレストへ入って商社の人と打合せを行った。その中で壁に耳ありと思っておかねばいけない事を聞かされ、事実そんな事例にもぶつかって“陰湿さ”が頭に残った。商社で使用のベンツを西独で修理点検したときトランクにマイクありとの点検結果表が寄せられたという話も実感がある。或る晩ホテルでなくて土地の人々がよく行く所で夕食をしようという事になって出掛けてみると大きなレストランでたくさんの丸テーブルがほぼ満席の上にバイオリンの楽団がリクエストに応じてテーブルをまわるといふ郷土色豊かな所だった。そこで聞いた話はこうであった。ある日ロシアの軍人が数名一つのテーブルを占有し楽団をクギづけにして

散々ロシアの歌を楽しんで出ていった。その間他の圧倒的な数のテーブルは皆だまっていたが、出て行ってしばらくすると誰れかがパチンと手をうったのを合図に店内はドンチャンさわぎになった。当時共産圏は固い結束の一枚岩と言われていた筈だが民族間の本当の姿はこれだと感じた。何れその姿は現実になるとその時ひらめいたが、10年以上経てベレストロイカが始まりその後の東欧の様子は御覧の通りである。曲折は当然今後もあるうが流れは止らないと思う。

当時もう一つ気がつかなかったが成程と思っただ話を次にしたい。西独の硝子会社の人と突然遭遇したのである。彼等も或る技術を開発し我々の動きを知った上で同国政府に売り込みを行っていたらしい。その時「皆さんは日本から来られた。日本はFAR EASTである。一方ここは私達の庭先きである。」という言葉、極東という実感をこれほど感じさせた事例はその後もない。技術の世界にはどちらが良いかという事しかないと思っていたが、他人の庭先きに居るという意識、しかもはるかなるFAR EASTから来た者が庭先きという意識をもち相手に対する配慮をすること、これは途方もなく大事な事だとハッとしたのを今でも思いだす。その後10年以上の間に私も更に色々な国で仕事があったがこのことが有意義であったと思っている。

摩擦の話が毎日報じられるが原点はどこにあるのだろうか。